鬼
おに
大図鑑
だいずかん
田村正彦 監修
さがわゆめこ 画
グラフィオ 編

古から語りつがれる「鬼」の全貌にせまる!!

こわい、神々しい、目をあわせてはいけない、にくらしい、など。「鬼」というものは、だれもが知っているのに、そのイメージははっきりとさだまってはいない。鬼とはなんなのか？　どういう存在なのか？　伝説や伝承、神話や民話、宗教や信仰などに登場するさまざまな鬼を、これから一挙、ご紹介していこう。

もくじ

・この本の見方 …… 6

第一章　～有名な鬼～ …… 7

・鬼とはなにか？ …… 8
- 鬼 …… 10
- 般若 …… 12
- 山姥 …… 14
- 餓鬼 …… 16
- 阿修羅 …… 18
- 風神・雷神 …… 20
- 酒呑童子 …… 22
- 鬼子母神 …… 24
- なまはげ …… 26
- 『桃太郎』の鬼 …… 28

・不吉な方角「鬼門」 …… 30

第二章　～妖怪の鬼～ …… 31

・妖怪とはなにか？ …… 32
- 天邪鬼 …… 34
- 牛鬼 …… 36
- 陰摩羅鬼 …… 38
- 百々目鬼 …… 40
- 夜行さん …… 42
- 鬼一口 …… 44
- 元興寺 …… 46

・「鬼」の字がつく言葉　その一 …… 48

第三章　～地獄の鬼～ …… 49

・地獄とはなにか？ …… 50
- 牛頭馬頭 …… 52
- 三途の川の鬼 …… 54
- 奪衣婆・懸衣翁 …… 56
- 等活地獄の鬼 …… 58
- 黒縄地獄の鬼 …… 60
- 衆合地獄の鬼 …… 62
- 叫喚地獄・大叫喚地獄の鬼 …… 64
- 焦熱地獄・大焦熱地獄の鬼 …… 66
- 阿鼻地獄の鬼 …… 68

・「鬼」の字がつく言葉　その二 …… 70

みんなが知っていて、だれも知らない「鬼」

監修　田村正彦

とても恐い顔をしている人は「鬼のような顔だ」といわれます。また、休憩もはさまずにガムシャラに仕事をしていると「鬼のようにはたらく人だ」なんていわれたりします。恐かったり、はげしかったり、強かったり、とんでもなかったりすると、「鬼」にたとえられてしまうようです。こんなふうに、日常会話でもつかわれるくらい、日本人の生活の中に「鬼」はとけこんでいて、だれもが「鬼」を知っています。

でも、「鬼」っていったいなんなのでしょう？　真剣にかんがえたことはありますか？

仏教の教義における鬼は、地獄の獄卒とされるほか、鬼神とよばれる神や、神の眷属（配下）をつとめる者もいます。伝説や伝承、昔話や民話だと、妖怪、神のつかい、外国人、凶悪な犯罪者など、さまざまにつたわります。

悪なのか、善なのか。
人間の敵なのか、味方なのか。
実在するのか、しないのか。

「鬼」とは、本当によくわからない存在です。

でも、「恐い」というところは、どのお話でも共通しているようです。

また、「鬼」にまつわるお話が平安時代に集中しているのも、興味ぶかいところです。

日本各地の伝説や伝承に登場する鬼と、仏教の教義でつたわる鬼、さらには鬼と和訳される海外の怪物など、さまざまな「鬼」を知り、くらべていくと、なぞにつつまれた恐怖の鬼の正体が、だんだんとわかってくるかもしれません。

第四章　～伝説・伝承の鬼～

・各地につたわる「鬼」の話……71
両面宿儺……74
羅城門の鬼……76
朱雀門の鬼……78
茨木童子……80
『金太郎』の鬼……82
大嶽丸……84
鈴鹿御前……86
金鬼・風鬼・水鬼・隠形鬼……88
前鬼・後鬼……90
猿鬼……92
安達ヶ原の鬼婆……94
宇治の橋姫……96
紅葉……98
阿久良王……100
鬼童丸……102
鬼丸……104
三吉鬼……106
温羅……108
金平鹿……110
阿用郷の鬼……112
八部鬼衆……114
夜叉……116
・厄をはらう「鬼瓦」……118

第五章　～海外の鬼～

・海外の「鬼」とは？……119
グール……120
グウェイ……122
オーガ……124
ゴブリン……126
ラークシャサ……128
アスラ……130
デビル……132
クランプス……134
ランダ……136
・鬼の豆知識……138
デビル……140
・結局、鬼とはなんだったのか？……142

鬼

本拠地 山、森、地獄ほか

出典 仏教経典、民話ほか

ツノ、金棒、トラの腰巻……日本人のだれもが知る「鬼」

いわゆる、鬼。そういわれて想像するのは、日本人ならば、ほぼおなじようなすがただろう。

いかつい顔に、たくましい体。大きな金棒をもち、頭からはツノが一本か二本つきでている、肌の色は赤、青、緑などさまざま。トラの皮でできたじょうぶな腰巻を愛用する。

このすがたは、絵本などの昔話に登場する鬼や、節分の鬼、かえ歌の「鬼のパンツ」の歌詞などで、日本人が子どものころからなれしたしんできたものだ。実際に鬼を見たことがないのに、共通の認識があるのは、不思議なことだといえる。

鬼という存在のベースとなるのは、やはり「恐怖」だろう。人間では太刀打ちできない怪力をもち、性格は残忍。酒と暴力をこのみ、気まぐれに人里にのりこんできては、悪さをする。いいかえると、とても「迷惑」な存在であり、遠くからやってくる「外敵」の象徴でもある。

そんな鬼だが、無敵ではない。昔話では英雄に退治され、節分の鬼にいたっては、弱点である豆をなげつければ、子どもでも撃退可能だ。こわいけれど、どこかにくめない鬼。昔からかわらず、日本人の日常の中に、鬼はいきづいている。

鬼のこぼれ話

日本中が涙した文学『泣いた赤鬼』

児童文学『泣いた赤鬼』（浜田廣介作、一九三五年刊行）には、二体の鬼が登場する。人間となかよくなりたい赤鬼と、赤鬼の友達の青鬼だ。青鬼は、自分が悪役になることで、赤鬼と人間をなかよくさせた。そのかわり、青鬼はいなくなった。赤鬼は、青鬼をうしなって大泣きする。

赤鬼も青鬼も、とてもやさしい心のもちぬしだ。この物語がヒットして、鬼がより身近なものになった。

牛鬼

本拠地 川のふち、滝壺、海岸ほか

出典 随筆『枕草子』、民話ほか

鬼と牛の頭に蜘蛛の体をもつ怪物 その凶暴さは平安時代から有名

ごき、ぎゅうきなどともよばれる、牛鬼。そのすがたは、頭が鬼と牛で体が蜘蛛といわれることが多いが、ほかにも、頭が鬼で体が牛、頭が牛で体が鬼など、さまざまにつたえられている。

牛鬼は、川のふちや滝壺、海岸など、水辺にすみついているという。水深がふかくなっている場所で身をひそめ、人間が近づくと、いきなりおそいかかって食べてしまうのだ。強靭なアゴをもち、一度かみついたら絶対にはなさず、そのまま水の中にひきずりこまれてしまう。

平安時代、牛鬼は有名な怪物だったようだ。清少納言が書いた随筆『枕草子』の中に、「名前がおそろしいもの」のひとつとして、牛鬼の名があげられている。

一部の地域では、牛鬼を神の化身としてうやまっている。牛鬼は、魔物をうちはらい、神のとおり道をきよめているという。

ほかにも、美女に化ける牛鬼や、毒をはく牛鬼、「濡れ女」や「磯女」など水辺にすむ美女の妖怪と協力して人間をおそって食べる牛鬼など、たくさんの伝承がある。昔からつたわる古い怪物だけに、そのすがたも性質も、千差万別だ。

鬼のこぼれ話

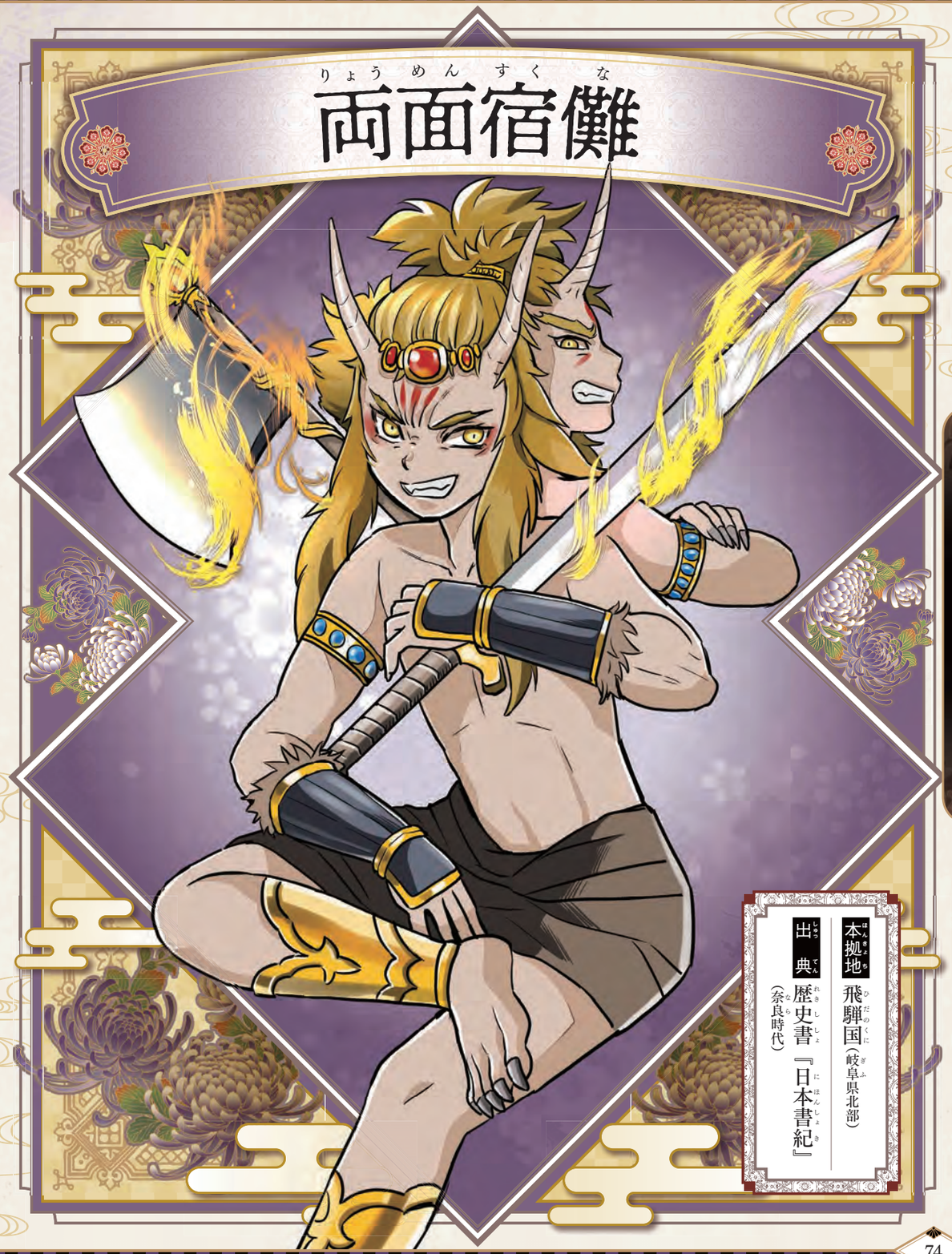
歴史書『吾妻鏡』に牛鬼出現の記述

鎌倉時代につくられた『吾妻鏡』という歴史書で、現在の東京都浅草に牛鬼があらわれたとある。

一二五一年、牛のような妖怪が浅草寺にあらわれた。寺の食堂にいた僧侶たち二十四人がおもい病気にかかり、七人が命をおとした。

ほかの歴史書では、隅田川から牛鬼がでて、浅草の牛嶋神社にとびこみ、牛玉という玉をのこしたことがしるされている。

両面宿儺



本拠地　飛騨国（岐阜県北部）
出典　歴史書『日本書紀』（奈良時代）

悪人とも神の化身ともいわれる顔が二つに手が四つの鬼

奈良時代にしるされた『日本書紀』は、正式にみとめられた日本の歴史書だ。その中に、つぎのような不思議な記述がある。

「仁徳天皇六十五年（西暦三七八年）、飛騨国に宿儺という怪物がいた。二つの顔があり、四つの手で二つの弓矢をつかった。天皇の命にしたがわず、民からの略奪を楽しんでいたので、将軍を派遣して退治した」

つまり、宿儺というあらくれ者の怪物がいたので、軍が退治したということだ。その怪物は、二つの顔、すなわち両面をもっていたので、両面宿儺とよばれる。

しかし、両面宿儺には、さまざまな伝承がある。岐阜県高山市の伝承では、すがたこそ『日本書紀』とおなじだが、身長は、約六十メートルあったという。その正体は観音様の化身で、その地に巣喰っていた七儺という悪鬼を、天皇の命をうけて退治したというのだ。

ほかにも、毒をもつ龍を両面宿儺が退治したとか、日本の安全を祈願してありがたいお祈りをしたなどとつたえられている。悪い怪物か正義の英雄かは不明だが、その特徴的なすがたから、いつしか鬼神とよばれるようになった。

鬼のこぼれ話

多数の龍を退治したドラゴンハンター？

各地につたわる民話で、両面宿儺は、悪い龍を討伐し、民をすくった英雄としてあがめられるものが多い。たとえば、土地をよごす毒龍を退治したというものや、民に害をなす龍神を退散させたというものなど。彼が退治した七儺という悪鬼は、女の龍だったとする伝承もある。

両面宿儺は、現代ファンタジー風にいってみれば「スゴ腕のドラゴンハンター」だったのかもしれない。